

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770254

研究課題名(和文)北アフリカ出土碑文に見る「ローマ人」意識の生成と変容

研究課題名(英文)The development of a Roman self-image on the inscriptions of Ancient North Africa

研究代表者

大清水 裕 (OSHIMIZU, Yutaka)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：70631571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ローマ帝国支配下の北アフリカにおける「ローマ人」意識について、皇帝礼拝に着目しつつ明らかにすることを目的とした。

アウグストゥス治世に外来の個人によって始められた皇帝礼拝は、1世紀前半のうちに都市単位で祭祀が行われるに至る。従来、ウェスパシアヌス治世に属州単位での皇帝礼拝が確立したことが重視されてきたが、本研究では、その根拠となる碑文が製作された2世紀後半の状況こそが重視されるべきであり、その頃までに先住民系の人々の間でも「ローマ人」意識が浸透していたことを示した。

研究成果の概要(英文)： By analysing the inscriptions about imperial cults, this project aims to show the development of a Roman self-image among the inhabitants of Ancient North Africa.

The imperial cult was introduced to Carthage by a (perhaps foreign) freedman during the reign of Augustus. It came to be managed by a municipal priest by the time of Claudius. Many scholars have emphasised the establishment of a provincial imperial cult in the age of Vespasianus, which shows an inscription from an inland city. However, this inscription was engraved in the age of Commodus; thus, it is necessary to pay more attention to the period of Commodus, by when North African people had already begun to view themselves as 'Romans'.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：古代ローマ 皇帝礼拝 カルタゴ 北アフリカ ラテン語碑文

## 1. 研究開始当初の背景

ローマ帝国によって統一された古代地中海世界は、数多くの都市国家からなる世界だった。一時的に覇権を握ったギリシアの都市国家とは異なり、ローマの支配が継続的に拡大したのには理由がある。歴史家タキトゥスの伝えるクラウディウス帝の言葉を見てみよう。

「スパルタやアテナイの人々が、戦争に勝っても、最後には破滅したという理由は、他にもない。彼らが征服した民族を、あくまで異国人として、わけへだてをしていたからではないか。」(国原吉之助訳、『年代記』11巻24章、岩波文庫、1981年。)

実際、ローマ市民権は、被征服地の名望家層を手始めに、多くの人々に付与された。最終的には212年の『アントニヌス勅令』によって、帝国内のほぼすべての自由民にローマ市民権が与えられた。地中海世界のほぼすべての住民が、「ローマ」という都市国家に属する市民とされたのである。ローマ帝国の拡大を考えるうえで、市民権をめぐる研究が大きな役割を果たしてきたことは確かである(例えば、A. N. Sherwin-White, *The Roman Citizenship*, 2nd ed., Oxford, 1973)。

しかし、ローマ市民権を付与されただけで、ローマ支配下に置かれた属州の人々が帝国を支える「ローマ人」となったわけではなかった。近年では、『アントニヌス勅令』が属州社会に及ぼした影響も限られたものだったと言われている(S. Corcoran, *The Empire of the Tetrarchs*, rev.ed., Oxford, 2000, pp. 1-24)。ローマ帝国支配下の住民統合という点についていえば、むしろ、それに先立って「ローマ人」としての意識が属州社会に浸透していたことの方が重視されなければならない。

その点で重要な史料を提供してくれるのが、本研究で対象とした北アフリカである。3世紀初頭の北アフリカでは、帝位をめぐる内戦で命を落とした人物が「ローマへの愛」ゆえに死んだと主張する墓碑が制作されている(拙稿「マクシミヌス・トラクス政権の崩壊と北アフリカ」、『史学雑誌』121編2号、2012年、1-38頁参照)。また、「ローマ的であること」あるいは「ローマ性」と訳される「ロマニタス Romanitas」という単語が初めて確認されるのも、3世紀初頭の北アフリカで暮らしたキリスト教徒、テルトゥリアヌスの著作『パトリウムについて』であった。北アフリカ出身で初めて帝位にまで登りつめたセプティミウス・セウエルス(在位:193~211年)とその子孫たちの下、北アフリカの人々が「ローマ人」としての意識を持って暮らしていたことは明らかに見える。

しかし、事態はそう単純ではない。2世紀

後半には元老院でも北アフリカ出身者が増加していたにもかかわらず(M. Corbier, *Les familles clarissimes d'Afrique proconsulaire (I<sup>er</sup> - III<sup>e</sup> siècles)*, *Epigrafi e ordine senatorio, Tituli 5*, Roma, 1982)、かつてのカルタゴと同じフェニキア系の出自だったセプティミウス・セウエルスは依然として「アフリカ人」とみなされ、恐れられた。皇帝自身、晩年になっても「アフリカなまり」のアクセントが消えなかったと言われる(*Scriptores Historiae Augustae, Septimius Severus*, 19)。この皇帝を扱った著名なモノグラフが、副題を「アフリカ人皇帝」としていることから分かるように、現在でもこの皇帝の「アフリカ人」としての側面は重視され続けていると言わねばならない(A. R. Birley, *Septimius Severus: the African Emperor*, London, 1971)。3世紀初頭の北アフリカの人々が「ローマ人」としての意識を持っていた可能性は高いとはいえ、同時代における同様に、現代においても、この問題は必ずしも明確には認識されないままに終わっている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ローマ帝国支配下の北アフリカで、「ローマ人」としての意識がいかなる経過を経て生み出され、変容していったのかを、同地で発見された碑文史料の分析を通して明らかにすることである。

3世紀初頭の北アフリカは、セプティミウス・セウエルス帝を輩出し、「ローマ性 Romanitas」という言葉が初めて用いられるなど、古代地中海世界の「ローマ化」を考える上で極めて重要な地域である。近現代の植民地支配をめぐる問題もあって避けられがちなテーマだが、本研究では、実証的な研究を通して、北アフリカの「ローマ化」の一端を明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

本研究においては、北アフリカにおける「ローマ人」意識の生成と変容の過程を明らかにするという目的を実現するために、帝政期の北アフリカで行われた皇帝礼拝の導入過程に着目した。その実態を明らかにするために用いた史料が、同地で大量に出土しているラテン語で刻まれた碑文である。

北アフリカで出土したラテン語碑文の多くは、『ラテン碑文集成 *Corpus Inscriptionum Latinarum*』(以下 *CIL* と略す)に収録されている。本研究においても、まずは *CIL* に収録された関連碑文の調査が第一歩となった。しかしながら、*CIL* は19世紀から刊行の続く史料集成であり、その情報はその後も更新され続けている。そのため、『アルジェリア・ラ

テン碑文集 *Inscriptions latines d'Algérie*』をはじめとする地域単位での碑文集成も並行して用いたほか、M. Khanoussi et L. Maurin (éd.), *Dougga, fragments d'histoire*, Bordezux et Tunis, 2000 など、近年新たに進められた碑文史料の再調査についても、できる限り目配りを行った。また、新発見の碑文については、『碑文学年報 *L'année épigraphique*』を参照している。

ただし、ラテン語で刻まれた碑文は、単にテキストとして存在したわけではない。彫刻を載せた台座や建築物の部材として利用された石や、建築物に掲げられた青銅板など、人の目につくような場所に設置された素材に刻まれていたのである。そのため、本研究の遂行にあたっては、現地での実見調査も不可欠であった。現地の治安上の問題から、必ずしも予定通りの調査を実現できたわけではなかったものの、2016年2月にはモロッコで、2017年12月にはアルジェリアで、それぞれ現地調査を実施した。それらの調査を通して、現地の実態により即した形で碑文史料を理解することが可能となった。

#### 4. 研究成果

ローマ支配下の北アフリカにおけるローマ皇帝礼拝の展開と、そこから確認される「ローマ人」意識の生成と変容は下記のようにまとめられる。

北アフリカにおけるローマ皇帝礼拝は、アウグストゥスの時代に既に始まっていた。アウグストゥスは、平和の回復に伴い、共和政末期の内戦で膨れ上がった兵士の数を削減する必要迫られていた。そのため、この時代には地中海世界の各地で退役兵植民市が建設されている。北アフリカでも、退役兵植民市として再建されたカルタゴをはじめ、いくつもの都市が建設された。北アフリカで最も古い皇帝礼拝の記録は、そのカルタゴで発見された碑文である。

その碑文には、アウグストゥスの一族に対して捧げられた神殿を、終身祭司たるプブリウス・ペレリウス・ヘドゥルスが自らの負担で建設したことが刻まれていた。その碑文の発見場所からすれば、その神殿が建てられたのは、カルタゴ市の中心に位置していたビュルサの丘であったと考えられる。関連史資料からは、ヘドゥルスが、煉瓦生産で財を成した帝室解放奴隷と関わりがあったことが分かっている。恐らくは、ヘドゥルスもまた、カルタゴ市再建というアウグストゥスの事業によって恩恵を得た解放奴隷であったと想定される。北アフリカにおける皇帝礼拝は、皇帝の事業から直接的な恩恵を受けた外来の個人によって始められたと考えられる。

皇帝礼拝がカルタゴという都市の単位で行われた記録は、「カルタゴ植民市のアウグストゥス終身神官」に言及したクラウディウ

ス帝治世(41~54年)の碑文である。興味深いのは、それに言及した一連の碑文が発見されたのが、カルタゴではなく、内陸の都市ドゥッガだったという点であろう。

ドゥッガは、ローマの支配が北アフリカに及ぶよりも前から存在した先住民系の都市であった。そこに、アウグストゥスの時代、恐らくは退役兵から成るローマ市民の一団が入植し、カルタゴ植民市に属する集落を形成した。それ以降、ドゥッガは先住民系の都市(civitas)とカルタゴ植民市に属するローマ市民の集落(pagus)からなる二重都市となったのである。その結果、「カルタゴ植民市のアウグストゥス終身神官」に言及した碑文がドゥッガに残されることになったのである。隣接して居住することになった先住民とローマ市民権を持つ入植者の関係は次第に密なものとなり、3世紀初頭には両者を統合する形で自治市(municipium)へと昇格した。内陸部に広く点在したカルタゴ植民市の付属地を介して、皇帝礼拝は次第に内陸部にも拡散していき、それに伴って、先住民の間でも「ローマ人」としての意識が形成されていったと考えられる。

以上のように、北アフリカにおける皇帝礼拝は個人単位で開始され、その後、都市単位でも行われるようになったことが確認された。それがさらに、カルタゴ市を首都とするアフリカ・プロコンスラリス属州の単位で行われるようになったのは、ウェスパシアヌス帝の治世(69~79年)だったとされている。しかし、その根拠となっているのはコンモドゥス帝の治世(180~192年)に作成された碑文だったことには、より一層の注意が払われるべきであろう。

近年の研究では、北アフリカ各地で捧げられた碑文など関連史資料を見る限り、ウェスパシアヌス帝の治世に大きな変化は見られないことが指摘されている。この碑文についても、ウェスパシアヌス帝の治世に属州単位での皇帝礼拝が確立したことを示す根拠とされるのみならず、その碑文が刻まれた2世紀後半という時代の状況を示すものとして理解されるべきであろう。そのような視点から見れば、本碑文は、2世紀後半に至ってようやく、先住民系の都市住民の間で皇帝礼拝が重要な役割を果たすようになっていたことを示すものと理解される。先住民の間でも「ローマ人」としての意識が浸透しつつあり、有力者の間で重視されるようになっていた証といえる。

以上のとおり、本研究においては、北アフリカの中でも主にカルタゴを中心とする地域の状況を研究成果として提出した。他方、北アフリカの中でも西部、古代のマウレタニア属州にあたる地域についても研究を進めており、その結果、上記の様相とは異なる見通しを得ている。

この地域にはアウグストゥス治世にマウレタニア王国が置かれ、クラウディウス帝に

よって属州化されるまで存続した。このマウレタニア王国と、その前身とも言えるヌミディア王国においては、ヘレニズム諸王国に由来すると考えられる支配者崇敬の痕跡が見いだされる。ローマ皇帝礼拝はヘレニズム諸王国の支配者崇敬に由来するものとされているが、ヌミディア王国やマウレタニア王国における支配者崇敬のあり方とローマ支配、とりわけ皇帝礼拝との関係については、従来の研究においてはさほど重視されてこなかったように思われる。この点については、今後の研究課題として、引き続き研究に取り組んでいきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

太清水裕「北アフリカにおけるローマ皇帝礼拝の展開：カルタゴとその周辺都市を中心に」『滋賀大学教育学部紀要』67号、2018年、123～137頁、査読無。

OSHIMIZU Yutaka, La création de la province de Maurétanie Sitifienne et l'empereur Maximien, *L'Africa romana. Atti del XX convegno internazionale di studi Alghero-Porto Conte Ricerche*, 26-29 settembre 2013, Roma, 2015, pp. 1081-1087, 査読無。

太清水裕「研究紹介 北アフリカに見る古代末期研究の展開：J.Conant, *Staying Roman*, Cambridge, 2012 を中心に」『滋賀史学会誌』16、2014年、104-108頁、査読無。

〔学会発表〕(計 3件)

太清水裕「バナサ青銅板に見るマルクス・アウレリウス治世の北アフリカ」第40回地中海学会大会、2016年。

太清水裕「テキストとしての碑文、モノとしての碑文：ラテン語碑文の場合」古代史研究会第2回春季研究集会：シンポジウム「西洋古代史研究における碑文とパピルス：利用の現状と可能性、課題をめぐって」、2015年。

太清水裕「コメント」史学会125周年事業リレーシンポジウム「東北史を開く：比較の視座から」(東北史学会・福島大学史学会との共催) 2014年。

〔図書〕(計 2件)

豊田浩志編『モノとヒトの新史料学：古代地中海世界と前近代メディア』勉誠出版、2016年、全272頁(担当範囲：太清水裕「石に刻まれたメッセージ：古代ローマの凱旋門とラテン語碑文」93-107頁)。

東北史学会・福島大学史学会・公益財団法人史学会編『東北史を開く(史学会125周年リレーシンポジウム2)』山川出版社、2015年、全256頁(担当範囲：太清水裕「ローマ帝国の北アフリカにみる「中心」と「周縁」」112-126頁)。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

太清水 裕 (OSHIMIZU, Yutaka)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：70631571